るみのかたにきぬらんと、かなしき中にも、忠信卿は、○中略いもうとの禪尼とかく申ゆるされにければ、濱名の橋よりぞ歸りにし、

〔十六夜日記〕濱名の橋よりみわたせば、かもめといふとりいとおほくとびちがひて、水のそこへもいる、いはのうへにもゐたり、

かもめ居る洲崎のいばもよそならず浪のかげこす袖にみなれて

〔夫木和歌抄二十一橋〕家集はまなのはしにて　前民部卿雅有

松かげのはまなのはしをうちすぎてとのうみあらきいそなみのこゑ

〔太平記二〕俊基朝臣再關東下向ノ事

傾ク月ニ道見ヘテ、明ケヌ暮レヌト行ク道ノ、末ハイヅクト遠江、濱名ノ橋ノ夕鹽ニ引ク人モナキ捨小船、沈ミハテヌル身ニシアレバ、誰カ哀ト夕暮ノ、晩鐘鳴レバ今ハトテ、池田ノ宿ニ著キ給フ、

〔李花集〕延元四年の春頃、遠江國井伊城に住侍りしに、濱名の橋かすみわたりて、橋本の松ばら湊の波かけて、はるゞと見渡さるゝあした夕べのけしき、面白く覺侍りしかば、

夕暮は湊もそことゑらすげの入海かけて霞む松原

はるゞと朝みつ汐のみなと船こぎ出るかたは猶霞つゝ

〔新後拾遺和歌集三夏〕夏歌中に　津守國道

いとゞ猶入海とをくなりにけりはまなのはしの五月雨の比

〔富士紀行〕十六日、○永享四年九月　橋もとの御とまりを、夜をこめて立侍しかば、濱名橋をうちわたして、

忘めやはまなのはしもほのゞと明わたる夜のすゑの川なみ

はまな河よるみつしほの跡なれやなぎさにみゆる海士の小舟は